万博という場で、音楽が果たした役割
—「ヒーリングJAZZサプリ」がつないだ心と文化—

万博からの
メッセージ

小　川　幸　子*

Music's Impact at the World Exposition:
Bridging Minds and Cultures via the "Healing Jazz Supplement" Project

はじめに：音楽という「副作用のない薬」を携えて

筆者がリーダーを務めるピアノ・コントラバス・ドラムスによるトリオ編成の音楽ユニット「TOT³（トット）」は、結成から10余年、一貫してジャンルの垣根を超えた音楽表現を追求してきました。活動のきっかけとなったのは、結成当初にリーガロイヤルホテル「ロイヤルホール」での演奏機会を得た際、大阪大学名誉教授の野村正勝氏、および関西フィルハーモニー管弦楽団名誉顧問で元代表の大川進一郎氏という、学術・芸術両面でのバックアップを受けたことに始まります。両氏のご指導を受けて「演奏」に留まらない、社会に資する音楽の在り方を模索し続けてきました。

私たちの活動コンセプトは、「音楽は副作用のない薬である」という持論に基づき、視覚情報と聴覚情報の高度な同期によって聴衆の没入感を最大化し、現代社会における癒しと活力を「ヒーリングJAZZサプリ」コンサートを通して提供することを目指しています。

2025年、大阪・関西万博という国際的な大舞台において、私たちはこの「音楽によるユニバーサルな対話」の実証実験とも言える３時間の単独公演の機会を得ました。本稿では次世代の文化発信における課題と展望につなげたいとの想いから、万博公演という特殊な環境下における設営・演出・運営のプロセスを、イベント主催者と出演者の視点でここに書き留めたいと思います。

【 リーガロイヤルホテル(ロイヤルホール)･梅田スカイビル･明石天文科学館･大阪倶楽部(大ホール)･コープこうべ･グッゲンハイム邸 】

第１章：万博出演への動機と「能舞台」の文化的意義

今回の万博出演を決意させた決定的な要因は、会場内に配置された「ポップアップステージ南」の構造にありました。このステージは日本の伝統芸能である「能舞台」を模した建築物で、隣接する「レイガーデン」とは「橋掛かり」により接続されていました。

【 ポップアップステージ南と大屋根リング 】

* Sachiko OGAWA

２歳よりピアノを始め、小学生の頃より歌とアンサンブル ピアニストとして活動。
文化庁海外公演などで演奏、ドイツ・フランス・イタリア・ オーストリア・ハンガリー・ルーマニア・中国・韓国・オーストラリアなど数多くの国での演奏経験をもつ。
作曲ではファッションショーへの楽曲提供、古典芸能を元にした音楽劇の作曲などジャンルにとらわれないアンサンブルの作曲やアレンジなど活動は多方面に及ぶ。
URL：https://totduo.com
E-mail：healing.jazz.supply@gmail.com

私の創作活動の根底には、能、文楽、俳句といった日本文化への美意識があります。同時に、世界各国を旅して得たインスピレーションを楽曲に昇華させるプロセスを重視しており、これまで150曲を超えるオリジナル作品を制作してきました。これらの楽曲はすべてインストゥルメンタル（無歌唱）で、言葉を介さない表現は人種や言語の壁を超えたユニバーサルな訴求力を持ちます。

日本からの海外発信に最適な舞台出演へのエントリーに際し、次の３点を訴求ポイントとして提案しました。

日本文化の再解釈：現代人に親和性の高いジャンルの音楽を通して、日本古来の伝統芸能を紹介

擬似的な世界旅行：多様な国々をテーマにした楽曲群による、国際博覧会に相応しい多文化共生

完全同期映像：聴覚と視覚の相乗効果による、言語不要の没入型体験

選考の結果、万博会期の終盤となる９月の連休中の日曜日、15時から21時（設営・撤収を含む）という演出上最も効果的な時間枠で出演のオファーを受けることができました。特筆すべきは、出演スケジュール表には国や自治体、あるいは複数団体が順番に出演する共同イベントが並ぶ中、わずか３名で最初から最後まで演奏し続ける単独公演は私たちのみであった点でした。これは提供された舞台設備と向き合う個人のクリエイティビティが国際イベントにおいてどこまで通用するかという、大きな挑戦の始まりを意味していました。

第２章：環境的制約への適応―海風とデジタル化への移行―

「ポップアップステージ南」は大阪湾に直接面した場所に位置していました。現地下見の際、私が目にしたのは、美しく広がる水平線が舞台奥に広がる絶景と同時に、容赦なく吹き付ける海風の脅威でした。この特殊な環境下で「ヒーリングJAZZサプリ」の核である没入感を維持するためには、従来の屋内型公演の機材構成を抜本的に見直す必要がありました。

１．映像システムの再構築

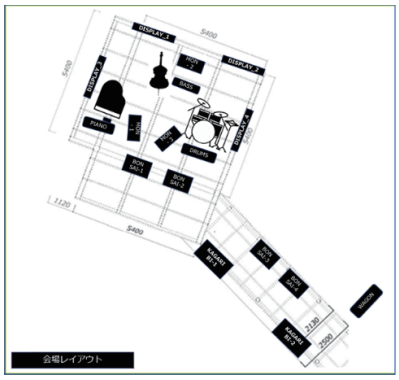
通常、私たちは80インチの大型スクリーンとプロジェクターを会場に持ち込み映像演出に使用しています。しかし、遮るもののない海風を正面から受ける屋外ステージにおいて、帆のように風を孕むスクリーン設営は転倒のリスクが極めて高くなります。そこで、映像演出を「投射型」から「発光型」へと転換しました。具体的には40インチの高輝度液晶モニター4台を舞台正面および左右の三方に配置、さらに重心を下げるためモニターの高さを舞台床面に合わせることで、耐風性と視認性の両立を図りました。

２．楽譜の完全ペーパーレス化と同期システムの導入

風対策は演奏者にも及びます。紙の楽譜は飛散のリスクがあるため、全楽曲の楽譜を13インチiPad画面による表示に変更しました。ここで課題となるのが３名の奏者が150曲を超えるレパートリーの中から選ばれた25曲を乱れなく進行させる点にあります。私たちは会場内に専用のWi-Fiネットワークを構築し、譜めくりを完全同期させるシステムを採用しました。これにより強風下で大量の紙を取り扱うストレスを排し、演奏にのみ集中できる環境を整えました。

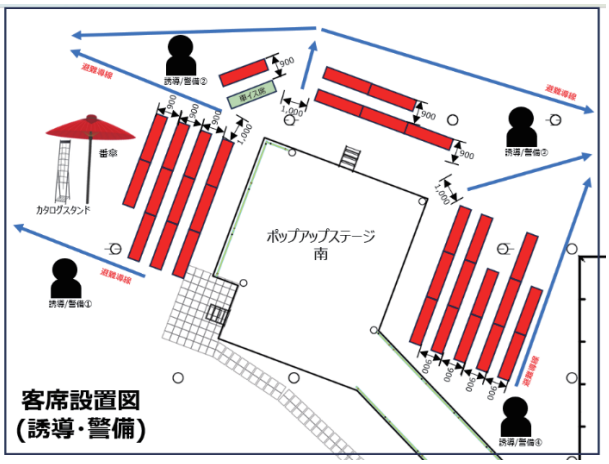
３．ホスピタリティとしての空間設営

万博のステージは立ち見を想定して作られていましたが、３時間の長丁場を「癒しの時間」とするためには着席での鑑賞が不可欠であると判断しました。私たちは自前で赤色の布を施した長椅子（床几）を用意し、能舞台を囲むように配置しました。これにより視覚的な華やかさを演出するとともに通りがかった来場者が自然と足を止め、没入できる「空間」を創出しました。



No.	設置物	表示
1	グランドピアノ（楽器）	PIANO
2	コントラバス（楽器）	BASS
3	ドラムセット（楽器）	DRUMS
4	モニタースピーカー	MON（3台）
5	液晶モニター	DISPLAY（4台）
6	盆栽（照明・設置台）	BONSAI（4台）
7	かがり火	KAGARIBI（2台）
8	音響照明ワゴン＋映像演出	WAGON（3台）
9	客席イス	

【 舞台設置機材の配置イメージ図 】



【客席設置イメージ図と避難誘導計画】

第３章：事務的手続きとロジスティクスの厳守

万博におけるパフォーマンスは、単なる芸術表現に留まりません。そこには、国家規模のイベントゆえの極めて厳格なレギュレーションが存在しました。

私たちは出演者であると同時に主催者として以下の申請業務を並行して遂行せねばなりませんでした。

電波使用申請：楽譜同期用Wi-Fiが会場内の通信インフラに干渉しないか、事前と設営後の現地確認

消防法への適合：自前で設置する客席の配置図を提出し、避難経路と座席間隔の厳密な現地審査

車両入場管理：液晶ディスプレイや音響機材、盆栽、楽器などを運搬する車両の数は計７台に及ぶが、同時入場は割り当てられた駐車場の数と同じわずか２台

これらの書類作成と調整作業はイベント前日まで数ヶ月にわたって続きました。特に、後述する設営時間の制約の中での「２台ずつの順次搬入」は、分単位の緻密な工程管理を要求されるものとなりました。

第４章：多文化共生を具現化する演出の多層化

万博という「世界の交差点」において、日本文化の真髄をいかに翻訳せずに伝えるか。私たちが導き出した答えは、伝統の「実物」を現代の感性でパッケージングすることでした。

１．盆栽による「生きた背景」の創出

本ステージには、通常の能舞台にあるべき「老松」の鏡板（背景壁）が存在しませんでした。その欠落を逆手に取り、私たちは国際的に評価の高い外国人盆栽師の協力を仰ぎました。樹齢300年を超える名品４鉢を舞台および橋掛かりに配し、「書かれた松」ではなく「生きている松」を背景としたのです。暮れゆく大阪湾の空と、時代を生き抜いてきた盆栽のシルエットが重なり合う光景は、何物にも代えがたい舞台美術となりました。

２．言語のユニバーサル対応

「インストゥルメンタル＋映像」のスタイルをさらに一歩進め、当日演奏する全25曲のタイトルと説明を日本語・英語・中国語の３カ国語による表示に変更しました。司会進行も同様に３カ国語で構成。楽曲の背景にある日本文化の精神性や、世界各地を旅して得た体験を、国籍を問わず瞬時に理解できる仕組みを整えました。

３．身体表現との融合

東京の劇団で振付・演出に携わり、比類なき身体能力を持つ女性ダンサーを招聘し、即興による舞踊を演奏中の演出に組み込みました。盆栽の間を縫い、海風を纏って踊る身体表現は、静的な音楽空間に動的な熱量を与えるには十分な演出となりました。

そしてこれらは個別の要素として存在するのではなく、音楽、映像、盆栽、舞踊、そして太陽が沈みゆく大阪湾の景観が一体となり、幽玄さと陶酔感をもたらす「非日常体験」として聴衆に提示されました。

第５章：実践報告―極限のタイムマネジメントと本番の熱量―

公演当日は、まさに時間との戦いでした。私たちに与えられた時間は「設営２時間、演奏３時間、撤収１時間」という、この規模の機材搬入としては極めてタイトなものでした。

前述の通り、７台のトラックを２台ずつしか搬入できない制約下で、開演１時間前になっても主要な荷物が届かないという緊張状態に陥っていました。さらに、開演30分前には消防と電波の現地点検が同時並行で行われます。コントラバスとドラムセッ

トを積んだ最終車両が到着したのは開演直前でしたが、10年間で累計500回以上のコンサートを現地リハーサル無しで本番に臨んできた私たちの経験が功を奏し、定刻17時には万全の態勢で本番を迎える準備が整っていました。

当日の演奏プログラムは、その日の日没の時刻から逆算し、空の色調の変化に合わせて選曲しました。

第１部：明るい陽光の中での華やかなジャズ・スタンダードとオリジナル曲。

第２部：薄暮（マジックアワー）に合わせた、静謐で内省的な日本モチーフの楽曲。

第３部：夜の静寂を切り裂くような、エネルギッシュなラテン・ジャズとクライマックス。

【盆栽とのダンス演出・3か国語による司会進行
盆栽師による作品説明・番傘と青の照明に彩られた舞台】

【ステージと客席全景:曲の展開に合わせて屋根の色も刻々と変化】

驚くべきことに、立ち見を含めた聴衆の多くが、３時間という長丁場を離れることなく最後まで楽しんで過ごしてくださいました。演奏の合間には、外国人盆栽師による3カ国語での盆栽解説を実施。日本人が外国人の言葉を通じて自国の文化を再発見するという、万博の理念を象徴するような光景が生まれました。

おわりに：万博のレガシーと次なる地平へ

大阪・関西万博での単独3時間公演を完遂した経験は、一音楽家としての矜持を深めるのみならず、文化発信における「個」の可能性を再確認させるものとなりました。膨大な事前調整、厳しい環境対策、そして言語の壁を越える演出の模索。これらすべてを自らの手で総合プロデュースし、母国で開催された国際博に刻印できたことは、生涯の誇りとなりました。

万博の真の成果（レガシー）とは、毎日の来場者数や経済波及効果といった数値のみで表されるものではありません。2025年９月21日（日曜日）、能舞台を模したステージで、晴天の心地良い潮風に吹かれながら共に非日常体験に没入した観衆の記憶の中にこそ、文化の種は宿ると信じています。「音楽」が言語を介さず、感情と記憶に直接アクセスできるツールであるならば、それは相互理解という万博の至上命題に対する、最も純粋な答えの一つであったと確信しています。

しかし、私の歩みはここで止まるものではありません。この経験から得た知見（極限環境下での演出や、多言語・多文化共生のためのプレゼンテーション能力）を携え、視線はすでに2030年のサウジアラビア・リヤド万博へと向いています。

「次はサウジアラビアの舞台でお会いしましょう」。

私はこの言葉を公言し続けることで、自らに適度な負荷をかけ、さらなる表現の深淵へと挑む所存です。大阪の地で灯した小さな「音楽の灯火」を中東の砂漠へと繋いでいくこと、それが万博というバトンを受け取った表現者としての私の責務であり、歓喜であると考えています。